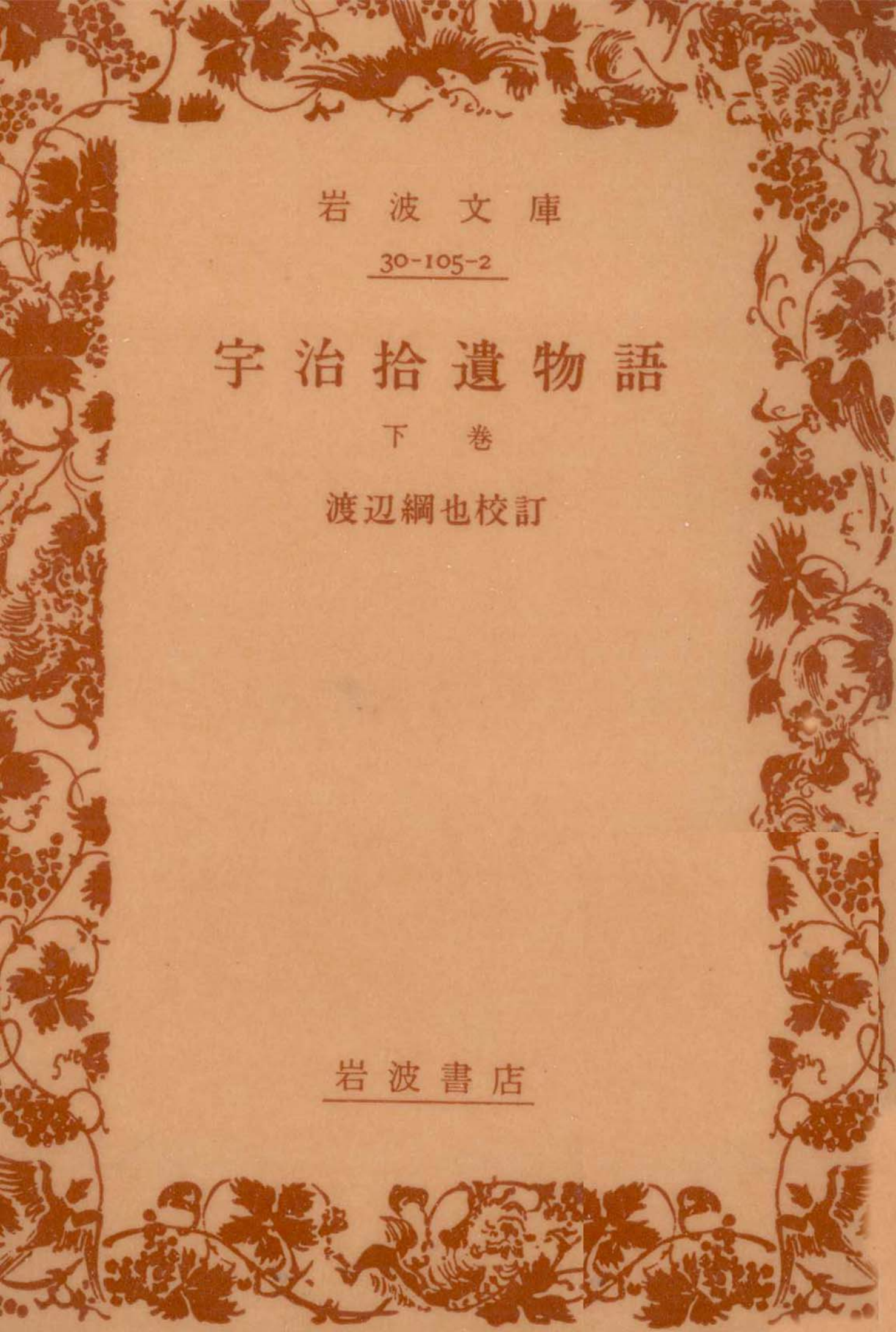




岩 波 文 庫

30-105-2

宇 治 拾 遺 物 語

下 卷

渡辺綱也校訂

岩 波 書 店

宇治拾遺物語 下巻〔全2冊〕

1952年8月25日 第1刷発行
1986年4月10日 第28刷発行

定価 300 円

校訂者 ^{わた}渡 ^{なべ}辺 ^{つな}綱 ^や也

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed in Japan

岩 波 文 庫

30-105-2

宇 治 拾 遺 物 語

下 卷

渡 辺 綱 也 校 訂



岩 波 書 店

目 次

下本二

一三	海賊はつしん出家事……………	九
一四	青常事……………	一四
一五	保輔盗人たる事……………	一七
一六	晴明を試僧事……………	一八
一七	晴明かへるを殺事……………	二〇
一八	河内守頼信平忠恒をせむる事……………	二二
一九	白川法皇北面受領のくだりのまねの事……………	二四
二〇	藏人得業猿さはの池龍事……………	二六
二一	清水寺御帳給る女事……………	二八
二二	則光盗人をきる事……………	三〇
二三	空入水したる僧事……………	三二
二四	日藏上人吉野山にて鬼にあふ事……………	三七
二五	丹後守ほうしやう下向の時致經父にあふ事……………	三九
二六	出家功德事……………	四〇
二七	達磨天竺僧の行みる事……………	四二
二八	提婆菩薩龍樹菩薩許に參る事……………	四四
二九	慈惠僧正受戒の日延引の事……………	四六
三〇	内記上人法師陰陽師紙冠破事……………	四八

下本一

一四	持經者叙實効驗事……………	四八
一五	空也上人臂觀音院僧正祈なをす事……………	四九
一六	増賀上人三條宮に參り振舞事……………	五一
一七	聖實僧正一條大路わたる事……………	五三
一八	穀斷ひじり露顯事……………	五五
一九	すゑなを少將哥事……………	五七
二〇	木こり小童隠題うたの事……………	五九
二一	高忠侍うたよむ事……………	六一
二二	つらゆきうたの事……………	六三
一〇	東人哥よむ事……………	六五
一一	河原院融公靈住事……………	六七
一二	八歳童孔子問答事……………	六九
一三	ていたい事……………	七一
一四	實俗觀「佛性」富事……………	七三
一五	宗行郎等射虎事……………	七五
一六	遣唐使子虎に食るゝ事……………	七七
一七	或上達部中將の時召人にあふ事……………	七九
一八	陽成院ばけ物の事……………	八一
一九	水無瀬殿むさゝび事……………	八三
二〇	一條棧布屋鬼の事……………	八五

一六	上をのぬし得し金事	七六
一六	元輔落馬事	八三
一六	俊宜まどはし神に合事	八四
一六	龜を買てはなつ事	八五
一六	夢買人事	八七
一六	大井光遠妹強力事	八九
一六	ある唐人女の羊に生たるしらずしてころす事	九三
一六	出雲寺別當父變になりたるをしりながら殺	

食事

一六	念佛僧魔往生事	九七
一七	慈覺大師入に纏續城行事	九八
一七	渡天僧穴にいる事	一〇三
一七	寂昭上人飛鉢事	一〇四
一七	清龍川聖事	一〇五
一七	優婆塞多弟子事	一〇七
一七	海雲比丘弟子童事	一〇九
一七	寬朝僧正ゆりき事	一一三
一七	經頼蛇にあふ事	一二五
一七	魚養事	一二八

下末二

一七	新羅國后金楊事	一二三
----	---------	-----

一八	玉のあたひはかりなき事	一二四
一八	北面女雜使六事	一二〇
一八	仲胤僧都連哥事	一二三
一八	大將いかる事	一二三
一八	御堂關白御犬晴明等きどく事	一二四
一八	高階俊平が弟入道算術事	一二七
一八	清見原天皇と大友王子とかつせん事	一二三
一八	頼時が胡人みたる事	一二四
一八	賀茂祭かへり武正兼行御覽事	一二八
一八	門部府生海賊射かへす事	一二九
一八	土佐判官代通清人違して關白殿にあひ奉る事	一五三
一八	極樂寺僧施仁王經験事	一五三
一八	伊良縁の世恒毗沙門御下文事	一五五
一八	相應和尚都卒天にのぼる事・そめ殿の后祈たてまつる事	一五七
一八	仁戒上人往生事	一六〇
一八	泰始皇天竺より來僧きんてく事	一六三
一八	後の千金の事	一六四
一八	盜跖と孔子と問答事	一六六

索引

解題	一〇五
----	-----

宇治拾遺物語 下卷

宇治拾遺物語 下本二 目録

(一) 板本ソノ
他ニハコノ項ヲ
「并」トシテ前
項ニ含メタリ。

- 一 海賊ほつしん出家事 一 青常事
- 一 保輔盗人たる事 一 晴明を試僧事
- 一 晴明かへるを殺事
- 一 河内守頼信平忠恒をせむる事
- 一 白川法皇北面受領のくだりのまねの事
- 一 藏人得業猿さはの池龍事
- 一 清水寺御帳給る女事 一 則光盗人をきる事*
- 一 空入水したる僧事
- 一 日藏上人吉野山にて鬼にあふ事
- 一 丹後守ほうしやう下向の時致經父にあふ事
- 一 出家功德事 一 達磨天竺僧の行みる事
- 一 提婆并龍樹并許に參る事

- 一 慈惠僧正受戒の日延引の事
- 一 内記上人法師陰陽師紙冠破事
- 一 持經者觀實効驗事
- 一 空也上人臂觀音院僧正祈なをす事
- 一 増賀上人三条宮に參り振舞事
- 一 聖寶僧正一条大路わたる事
- 一 穀斷ひじり露顯事 一 すゑなを少將哥事
- 一 木こり小童隱題うたの事
- 一 高忠侍うたよむ事 一 つらゆきうたの事*

宇治拾遺物語 下本二

「一二三 海賊ほつしん出家事」

今は昔、攝津國にいみじく老たる入道の、おこなひうちしてありけるが、人の「海賊にあひたり」といふ物語するつゝにいふやう、われはわかゝりしおりは、まことにたのもしくてありし身なり。きるもの、食物にあきみちて、明暮海にうかびて世をば過しなり。淡路の六郎ついでくしとなんいひし、それに安藝の嶋にて、こと舟もことになかりしに、船一艘ちかくこぎよす。見れば廿五六斗の男のきよげなるぞ、主とおぼしくてある。さてはわかき男二三人ばかりにて、わづかに見ゆ。さては女どもの*よきなどあるべし。をのづからすだれのひまよりみれば、かはごなどあまたみゆ。物はよくつみたるに、はか／＼しき人もなくて、

「二三」

(一) 板本ソノ他ニハ「この御ふねをたのみて」トアリ。
 (二) 寮本ニハ「人ども」トアリ。
 (三) 寮本一本等ニハ「物もおぼえず……」トアリ。
 (四) 寮本ニハ「とり入つ」トアリ。
 (五) 寮本ニハ「とり入るゝに」トアリ。

たゞこの我舟につきてありく。やかたのうへに、わかき僧一人ゐて、經よみてあり。くだれば、おなじやうにくんだり、嶋へよれば、おなじやうによる。とまれば又とまりなどすれば、此舟をえみもしらぬなりけり。

あやしと思て、問てんと思ひて、「こはいかなる人の、かくこの舟にのみ、ぐしてはおはするぞ、いづくにおはする人にか」とへば、「すはうの國より、いそぐことありてまかるが、さるべきたのもしき人もぐせねば、おそろしくて、此*舟をたのみて、かくつき申たるなり」といへば、いとおこがましと思ひて、「これは京にまかるにもあらず、爰に人待なり、待つて、すはうの方へくだらんずるは、いかでぐしてとはあるぞ、京にのぼらん舟に、ぐしてこそおはせめ」といへば、「さらばあすこそは、さもいかにせめ、こよひはなを御ふねにぐしてあらん」とて、嶋がくれなる所にぐしてとまりぬ。人ども、^(三)「たゞいまこそよき時なめれ、いざこのふねうつしてん」とて、この舟にみな乗時に、^(三)おぼえずあきれまどひたり。物のあるかぎりわが舟にとりあれつ。^(四)人どもはみな男女みな海にとり入間に、*主人手をこそぐとすりて、水精のずくのをきれ^(五)「三丁ぞ」

【三丁ぞ】

たらんやうなる涙を、はらくとこぼしてはいく、「よろづのものはみなとり給へ、たゞ我命のかぎりはたすけ給へ、きやうにおひたる親のかぎりにわづらひて、『今一度みん』と申たれば、よるをひるにて、つげにつかはしたれば、いそぎまかりのぼる也」ともえいひやらで、われにめをみあはせて、手をするさまいみじ。「これ、かくないはせそ、れいのごとく、とく」といふに、めをみあはせてなきまどふさま、いとくいみじ。あはれにむざうにおぼえしかども、さいひていかゞせんと思なして、海にいれつ。やかた*の上に甘斗にてひはつなる僧の、經袋くびにかけて、よるひる經よみつるをとりて、うみにうち入つ。時に手まどひして、經袋をとりて、水のうへにうかびながら、手をさゝげて、この經をさゝげて、うきいでくするときに、けうの法師の、今までしなぬとて、舟のかいして、かしらをはたとうち、せなかをつきいれなどすれど、うきいでくしつゝ、この經をさゝぐ。あやしと思ひてよく見れば、この僧の水にうかびたる跡まくらに、うつくしげなる童の、びづらゆひたるが、白きずはへをもちたる、二三人斗見ゆ。僧のかしらにてを

かけ、一人は經をさゝげた*るかいなを、とらへたりとみゆ。かたへの
物どもに、「あれみよ、この僧につきたるわらはべはなにぞ」といへば、
「いづらく、さらに人なし」といふ。わが目にはたしかに見ゆ。この
童部そひて、あへて海にしづむことなし。うかびてあり。あやしければ、
みんと思ひて、「これにとりつきてこ」とて、さほをさしやりたれば、
とりつきたるを引よせれば、人々「などかくはするぞ、よしなしわざ
する」といへど、「さはれ、この僧ひとりはいけん」とて、舟にのせつ。
ちかくなれば、此わらはべは見えず。この僧にとふ。「我は京の人か、
いづこへおはするぞ」ととへば、「ゐ中の人に候、法師*になりて、久
しく受戒をえ仕らねば、『いかできやうにのぼりて受戒せん』と申しか
ば、『いざ、われにぐして、山にしりたる人のあるに申つけて、せさせ
ん』と候しかば、まかりのぼりつるなり」といふ。「わ僧の頭やかいな
に取つきたりつる兒共はたそ、なにぞ」といへば、「いつかさるもの候
つる、さらにおほえず」といへば、「さて經さゝげたりつるかいなにも、
わらはそひたりつるは、そもくなにと思ひて、たゞ今しなんとするに、

〔四丁ウ〕

(六) 一本ニハ
「あまつさへか
ろくて」、纂本
ニハ「あまりに
かろくて」トア
リ。

(七) 纂本ニハ
「ほろ／＼とな
かる」トアリ。

このきやうぶくろをばさゝげつるぞ」とへば、「死なんずるは思ひま
うけたれば、命はおしくもあらず、我はしぬとも、きやうを*しばしが
【五丁オ】

ほどもぬらし奉らじとおもひて、さゝげ奉りしに、かいなたゆくもあ
らず、あやまりてかろくて、^(六)かいなもななくなるやうにて、たかくさゝ
げられさぶらひつれば、御經のしるしこそ、しぬべき心ちにもおぼえ
候つれ、命いけさせ給はんはうれしき事」とて泣に、此婆羅門の様なる
心にも、あはれにたうとくおぼえて、「これより國へ歸らんとや思ふ、
又きやうにのぼりて、じゆかいとげんと心あらば、をくらん」といへ
ば、「さらにじゆかいの心も今は候はず、たゞ歸さぶらひなん」といへ
ば、「これより返しやりてんとす、さてもうつくしかりつる童部*は、
なにかかくみえつる」とかたれば、この僧哀にたうとくおぼえて、
^(七)ほろ／＼なかる。「七つより法華經よみ奉りて、日ごろもこと／＼なく、
物のおそろしきまゝにもよみ奉りたれば、十羅せつのおはしましけるに
こそ」といふに、この婆羅門のやうなるものゝ心に、さは佛經は、めで
たくたうとくおはします物なりけりと思て、この僧にぐして、山寺など

【五丁ウ】

(八) 寮本ニハ
「やなぐひ」ト
アリ。

へいなんと思心つきぬ。さてこの僧と二人ぐして、かてすこしをぐして、のこりの物どもはしらず、みな此人ゝにあづけてゆけば、人々、「物にくるふか、こはいかに、俄の道心世にあらじ、物のつきたるか」とて*
〔六丁ウ〕
 せいしとゞむれどもきかで、弓、(八)ゑびら、たち、かたなもみな捨て、この僧にぐして、これが師の山寺なる所にいきて、法師になりて、そこに經一部よみまいらせて、おこなひありくなり。かゝるつみをのみつくりしが、むざうにおぼえて、この男の手をすりて、はらくとなきまどひしを、海に入しより、少道心おこりにき。それにいとゞこの僧に十羅せつのそひておはしましけると思に、法花經のめでたくよみ奉らまほしくおぼえて、俄にかくなりてあるなりと、かたり侍りけり。

〔一二四 青常事〕

今は昔、村上の御時、古き宮の御子にて、左京大夫な*る人おはしけ
〔六丁ウ〕
 り。ひとゝなりすこしほそだかにて、いみじうあてやかなるすがたはし

(二) 寮本ニハ
「色は露草の
花を……」トア
リ。

(二) イ本ニハ
「聞かば……」
トアリ。

たれども、やうだいなどもおこなりけり。かたくなはしき様ぞしたりける。頭のおぶみがしらなりければ、ゑいはせなかにもつかず、はなれてぞふられける。色ははなをぬりたるやうにあをじろにて、まかぶらくぼく、はなのあざやかにたかくあかし。くちびるうすくていろもなく、ゑめば齒がちなる物の、しにくあかくて、ひげもあかくて、ながよりけり。こゑははな聲にてたかくて、物いへば一うちひぎきて聞えける。あゆめば身をふり、肩をふりてぞありきける。色の*せめてあをかりければ、

〔七丁オ〕

「あをつねの君」とぞ、殿上の君達はつけてわらひける。わかき人たちのたちゐにつけて、やすからずわらひのゝしりければ、みかどきこしめしあまりて、「こののをこのものの、これをかくわらふ、びんなきことなり、父の御子聞てせいせずとて、我をうらみざらんや」など仰られて、まめやかにさいなみ給へば、殿上の人ゝしたなきをして、みなわらふまじきよし、いひあへりけり。さていひあへるやう、「かくさいなめば、今よりながく起請す、もしかくしやうして後、『あをつねの君』とよびたらん物をば、さけ、くだ物など取いださせて、あがひせん」*とい

〔七丁ウ〕